

音楽科学習指導案

指導者 甫出 頼之

日時 令和4年11月19日(土) 第1校時 9:20~10:10
年組 中学校 第1学年2組 計40名(男子15名,女子25名)
場所 中学校音楽教室
題材 百人一首でアンサンブル曲をつくろう

題材について

本題材は、百人一首の和歌を素材としてアンサンブル曲を作り、創作表現を創意工夫することをねらいとする。和歌に込められた思いや詠まれた背景を想像し、朗読するときの抑揚やリズム、雰囲気などを生かしながら、和歌を重ねて読んだり、変化させて読んだりして声の響きを楽しむとともに、打楽器の音を加えることによって、それぞれの音素材の特徴、音の重なり方や反復、変化、対照などの構成を理解し、課題や条件に沿ったふさわしい音の選択や組み合わせなど必要な技能を身に付けて、グループで創意工夫しながら自分たちのアンサンブル曲を創作する。百人一首(小倉百人一首)は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活動した公家・藤原定家が、飛鳥時代の天智天皇から鎌倉時代の順徳院まで、100人の歌人の優れた和歌を一首ずつ選んだ秀歌撰である。中学校や高等学校の国語科では、古典の入門に適した教材として取り上げられることが多い。また、歌集としてよりも「かるた」としての知名度が高く、学校行事として「かるた大会」「百人一首大会」が行われたり、「かるた甲子園」(全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会)が行われたりするなど、学校文化との関わり合いも深い。本校の国語科では百人一首の学習を行っており、学校行事として毎年12月には校内で「百人一首大会」が開催されている。生徒の興味・関心が高い百人一首の和歌を学習の素材として創作活動を行うことによって、積極的に主体的・協働的な創作活動を行い、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付け、音楽に対するイメージを膨らませたり他者のイメージに共感したりして、どのように表現するか創意工夫することのできる資質・能力の育成を図る。

本学級の生徒は、これまでに創作の授業として、ボディパーカッションのアンサンブル曲をグループで制作し発表し合う授業を行った。体から出る音だけではなく体の動きに注目して創意工夫し、音楽と体の動きが連動する楽しさにも気付くことができた。今回は、打楽器を使用することで音色の幅が広がり、音素材の特徴及び音色の重なり方への理解をさらに深めることが期待できる。

指導にあたっては、朗読の重ね方や打楽器の音色の重ね方を理解する手助けとして、言葉によるアンサンブル曲を演奏したり、参考曲を聴取したりして、創作活動に取り組みやすくする。言葉の反復、変化、対照に注目して言葉のアンサンブル曲を演奏したり、楽器が効果的に曲の雰囲気をつくり出している楽曲を聴取したりすることによって、アンサンブル曲を工夫して考え、興味をもって活動に取り組めるようにしたい。また、録音した和歌と楽器音源をボタンに割り当てたサンプラーアプリとヘッドホン、音源を同時に共有できるイヤホン・スプリッターを使用したグループによる創作活動を行うことによって、教室で一斉に創作活動を行う際に起こる、すべてのグループの音が混ざり合い自分たちのグループの音のみに集中して活動することが難しいという問題を解決し、音色の重なりをより純粹に感じて創作活動ができるようにしたい。

指導目標

- ・音素材の特徴及び音の重なり方の特徴や反復，変化，対照などの構成上の特徴を理解するとともに，音を選択したり組み合わせたりする技能を身に付けられるようにする。
- ・音色，リズム，テクスチャを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら，創作表現を創意工夫できるようにする。
- ・百人一首を基にアンサンブル曲をつくることに関心をもち，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に創作の学習活動に取り組む態度を養う。

指導計画（全5時間）

次	時	学習内容
1	1	言葉によるアンサンブル曲を演奏する。
2	2～4	百人一首の和歌を基に，アンサンブル曲を創作する。（本時4／5）
3	5	創作したアンサンブル曲を発表し聴き合う。

本時の目標

創作する音楽をより魅力的なものにするために，和歌に込められた思いや背景を大切に，自分たちの演奏技能や楽器の音色の特徴を生かした工夫を取り入れることができる【思考力，判断力，表現力等】

「教科等本来の魅力に迫るための教員の資質・能力」との関連

生徒がこれまでの授業で行った創作活動を生かしたり，学校行事と関連付けたりすることによって，アンサンブル曲の創作という新しい課題に意欲的に取り組むことができるようにした【授業構想力】。また，各グループが他のグループの音に邪魔されず，集中して創作活動や練習，振り返りができるように，タブレットなどの ICT 機器を効果的に使用した【授業実践力】。

学習の展開

学習活動と内容	○指導上の留意点（◆評価）
1. 前時の中間発表を各グループで振り返る。 ・この部分の音の重なりは，思っていたのとは違ったな。 ・朗読と楽器の音が出るタイミングが合っていないので，今日は合わせる練習がしたいな。	○前回の中間発表の動画を，タブレットを使用して視聴させる。その際，ヘッドホンとイヤホン・スプリッターを使用し，グループのメンバーのみが音声を共有できるようにする。 ○グループ協議では，朗読と楽器の音色の重なりがイメージ通りであったか，その他，最終発表に向けて，改善点がないかという視点を示す。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">【課題】 朗読と音色の重なりを見直して，さらに魅力的なアンサンブル曲にしよう。</div>	

<p>2. グループでアンサンブル曲をつくる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この和歌に込められた思いを考えると、楽器の音の出し方を変えた方がいいな。 ・この音を合わせるために、お互いによく動きを見ながら演奏するといいな。 <p>3. 本時の創作活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日は、和歌の言葉の感じに合わせて、音の出し方を工夫したりリズムを合わせたりする練習ができたよ。 ・他のグループは、こんなところに気を付けて練習していたのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ○次時に最終発表を行うことを伝え、見通しを持たせる。 ○朗読した和歌や楽器の音を録音したタブレットのサンプラーアプリを使用して、創作活動、練習をさせる。その際、グループのメンバーのみが音声を共有できるようヘッドホンとイヤホン・スプリッターを使用させる。 ○隣の音楽準備室で、リハーサルを行わせる。 <p>◆創作する音楽をより魅力的なものにするために、和歌に込められた思いや背景を大切にしながら、自分たちの演奏技能や楽器の音色の特徴を生かした工夫を取り入れることができている。</p> <p>【思考力、判断力、表現力等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○タブレットに、本時の創作活動で気付いたことや工夫したこと、練習で気を付けたところなどを記入して提出させ、電子黒板に提示しクラス全体で共有させる。
--	---

授業の分析

1. 主な成果

本校では毎年12月、「百人一首大会」が開催される。1年生にとっては初めての「百人一首大会」であり、行事への期待度が高く、国語科での暗唱の取り組みにも熱心な様子が2学期以降見られた。今回、「百人一首大会」直前の時期に「百人一首」を題材として授業を設定したことで生徒の意欲を引き出すことができた。

和歌の朗読の仕方を工夫したり、その朗読に楽器の音を重ねたりする際には、和歌に抑揚を付けて読んだ時の日本語の雰囲気を感じ、和歌の意味を表現しようとする様子が見られた。

2. タブレット端末の効果的な使用

(1) 録音やビデオによる記録と振り返り

毎授業ごとに発表の機会を設け、それをタブレット端末のアプリ「ロイロノート」を使用して録音やビデオで記録をした。

「ロイロノート」とは、クラウド型授業支援アプリで、情報や考えをまとめたカードを作成し、それをみんなで共有することができる。カードは紐付けをして複数枚のグループを作ることができ、カードをつなぎ合わせてスライドショーのような使い方もできる。また、タブレット端末のカメラやマイクを使用し、ビデオのカードや録音のカードを作成することができるので、毎時間の発表を記録し、さらに教師の気付きを書いたカードも紐付け返却して、次の授業の冒頭で前時の振り返りをする活動を行った。

冒頭での振り返りだけではなく、グループによる創作活動を行う際に、参考にする様子も見られた。ビデオだけではなく、教師の気付きも合わせて生徒たちに示すことによって、生徒たちが成果や課題を見つけて、よりわかりやすく活動することができたようである。

(2) サンプラーアプリを使用した創作活動

今回の創作活動では、録音した和歌と楽器音源をボタンに割り当てたサンプラーアプリとヘッドホン、音源を同時に共有できるイヤホン・スプリッターを使用することによって、教室で一斉に創作活動を行う際に起こる、すべてのグループの音が混ざり合い自分たちのグループの音のみに集中して活動することが難しいという問題を解決し、音色の重なりをより純粹に感じて創作活動をすることができた。

3. 今後の課題

課題としては、楽器の奏法の工夫ができないことが挙げられる。サンプラーアプリに設定する楽器の音には、同じ楽器でいくつかの奏法の音を用意しているが、サンプラーアプリによる活動だけでは奏法の違いによって起こる音色の変化や細かいニュアンスまで気を配ることができず、想像することが難しかった。そのため、生徒が音のイメージのみで検討を行った後、実際の発表やリハーサルで音に出してみても初めてわかることもあった。生徒は小学校までの経験で楽器の奏法やその違いによって起こる細かいニュアンスの変化について、ある程度理解しており、その経験でサンプラーアプリを使用した活動の難しさを補っていたと考えられる。

二点目としては、楽器の種類が少なかったという点が挙げられる。今回は初めての実践で準備に手間取ってしまい、多くの音源が用意できなかった。今後の活動ではより多くの楽器の音を録音し用意する必要がある。

三点目に、ヘッドホンをしていて音が聴こえない状態なので、各グループでどのような創作活動が行われているのかわかりにくく、教師の指導がしにくいという点である。解決策としては、教師も生徒たちと一緒にヘッドホンをして同時に聴きながら指導したり、一時的に実際に音を出させて確認したりする方法などが考えられる。今回は、中間発表や本時のリハーサルを通じて指導を行った。